

## 5.2 河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは生態系の健全さの指標となる生態系上位種のヘビ類や、河川敷の草地環境を利用するカヤネズミなどの確認状況を整理しました。なお、前回、前々回調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、移動性の高い種や、限られた季節にしか見られない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、全国的な傾向を把握するための参考です。

### 【河川の自然度（爬虫類の確認状況）】

（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

- **全国のほとんどの河川でシマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシを確認**

地域の生態系の良好さをみるため、生態系の上位種であるシマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシの確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った26河川のうち、シマヘビは21河川、アオダイショウは20河川、ヤマカガシは16河川で確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみるとシマヘビとアオダイショウでは確認河川数の増加がみられました。

（資料掲載：5-8～5-10、5-31ページ）

### 確認河川数の比較（対象河川：25河川）

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
シマヘビ	20河川	21河川	21河川
アオダイショウ	18河川	18河川	20河川
ヤマカガシ	16河川	16河川	16河川

生態系の上位種は、環境変化による種構成の変化、また、それに伴う餌生物の変動などの影響を最も受けやすいことから、地域の生態系の変化をみる上で重要なグループであると考えられます。

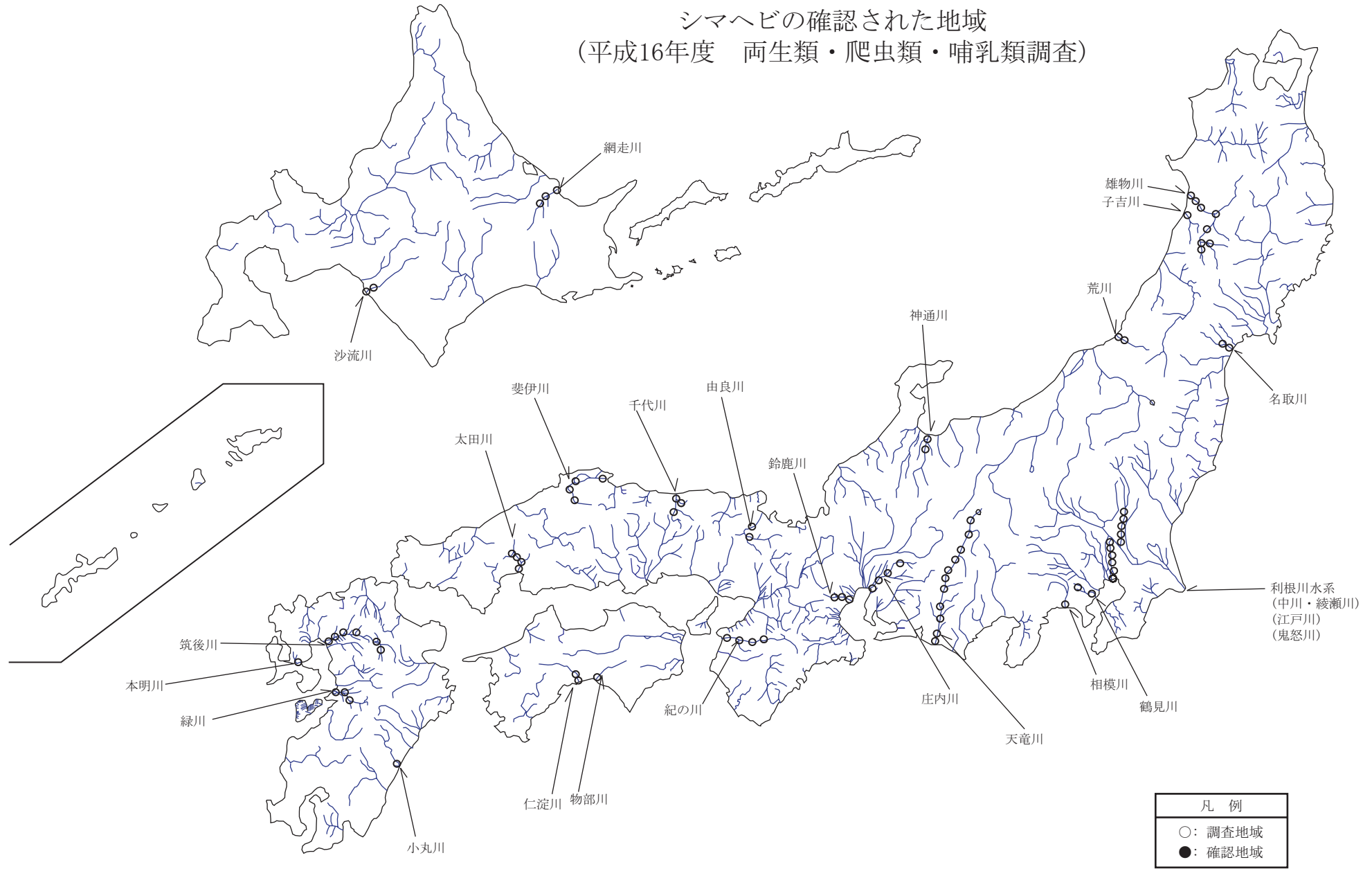
シマヘビとアオダイショウは北海道地方から九州地方南部まで分布し、ヤマカガシは北海道地方を除く本州から九州地方にかけて分布しています。今回調査では、シマヘビは北海道地方から九州地方までの広い範囲で、アオダイショウは北海道から中国地方までの広い範囲で、ヤマカガシは北海道地方を除いた地方で確認されました。

前々回から今回調査をみると、シマヘビとアオダイショウでは確認河川数の増加がみられました。一方、ヤマカガシでは前々回から今回調査にかけて確認河川数に変化はみられませんでした。

このことから調査対象河川においては、これら生態系上位種の生息が可能な生態系が維持されているものと推測されます。

シマヘビの確認された地域  
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

5-8

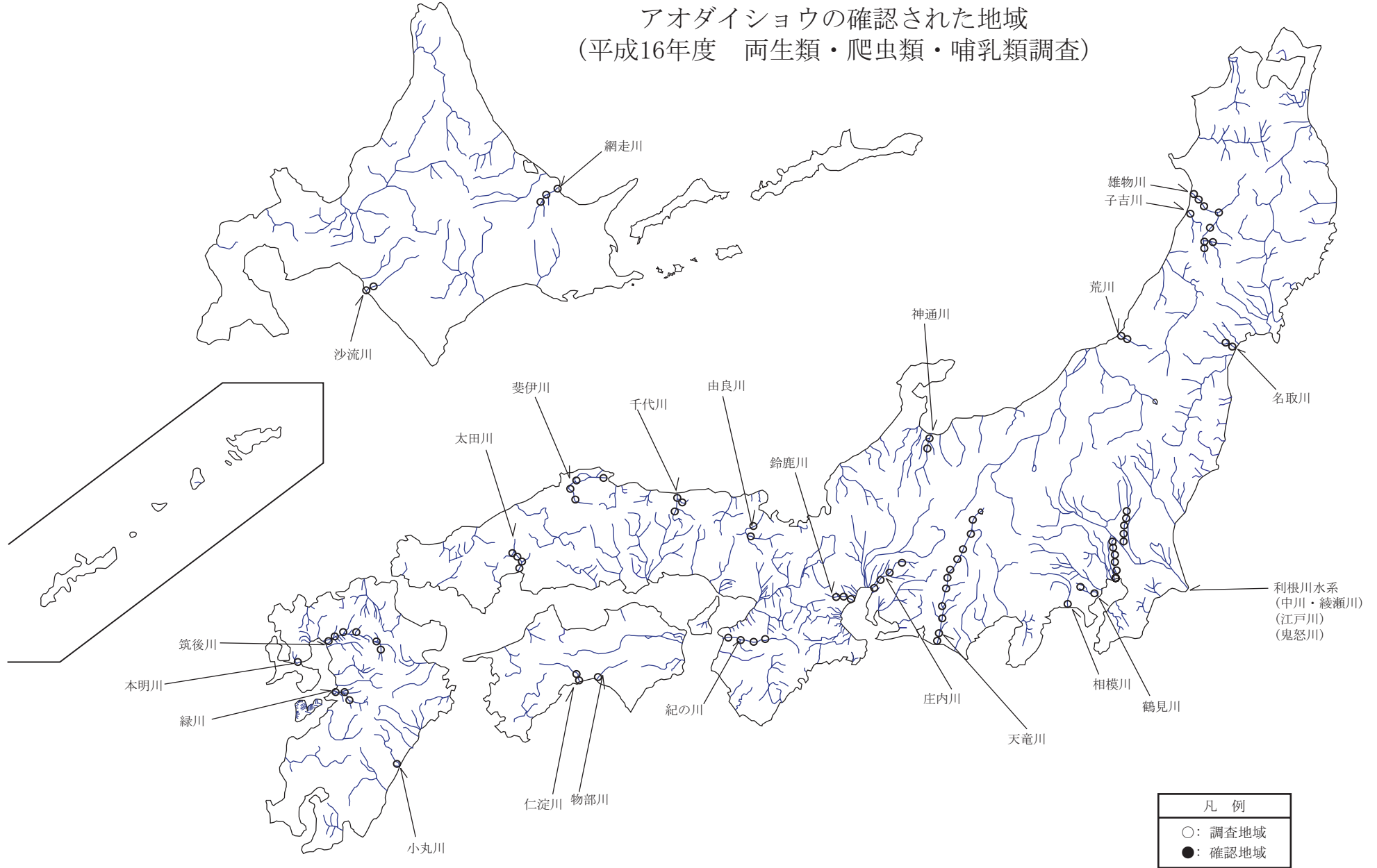


凡例	
○	調査地域
●	確認地域

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

アオダイショウの確認された地域  
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

5-9

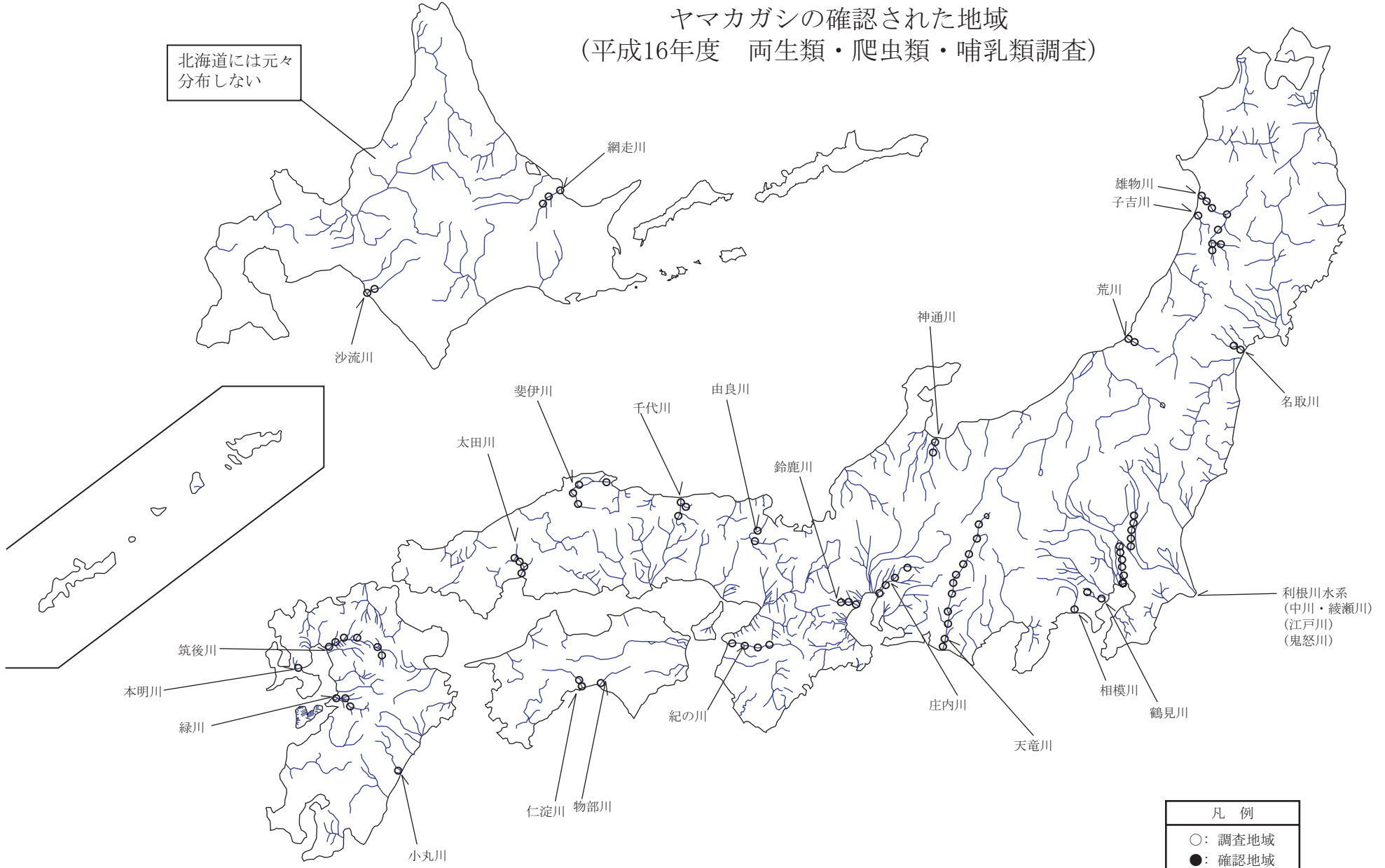


注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

# ヤマカガシの確認された地域 (平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

北海道には元々  
分布しない

5-10



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

- **全国のほとんどの河川でタヌキ類、キツネ類、イタチ類、ウサギ類を確認**

河川周辺における宅地化などにより、生息域が限定されつつあると考えられているタヌキ類（タヌキ、エゾタヌキ）、キツネ類（キツネ、キタキツネ）、イタチ類（テン、エゾクロテン、イタチ、アナグマ）、ウサギ類（ノウサギ、エゾユキウサギ）等の中型哺乳類の確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った 26 河川のうち、タヌキ類、キツネ類、ウサギ類は北海道地方から九州地方にかけて、イタチ類は東北地方以南の広い範囲で確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみると、キツネ類とウサギ類で確認河川数の増加がみられました。  
（資料掲載: 5-12～5-15、5-31～5-32ページ）

確認河川数の比較（対象河川: 25 河川）

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
タヌキ類	22 河川	24 河川	23 河川
キツネ類	16 河川	19 河川	19 河川
イタチ類	21 河川	20 河川	18 河川
ウサギ類	14 河川	17 河川	20 河川

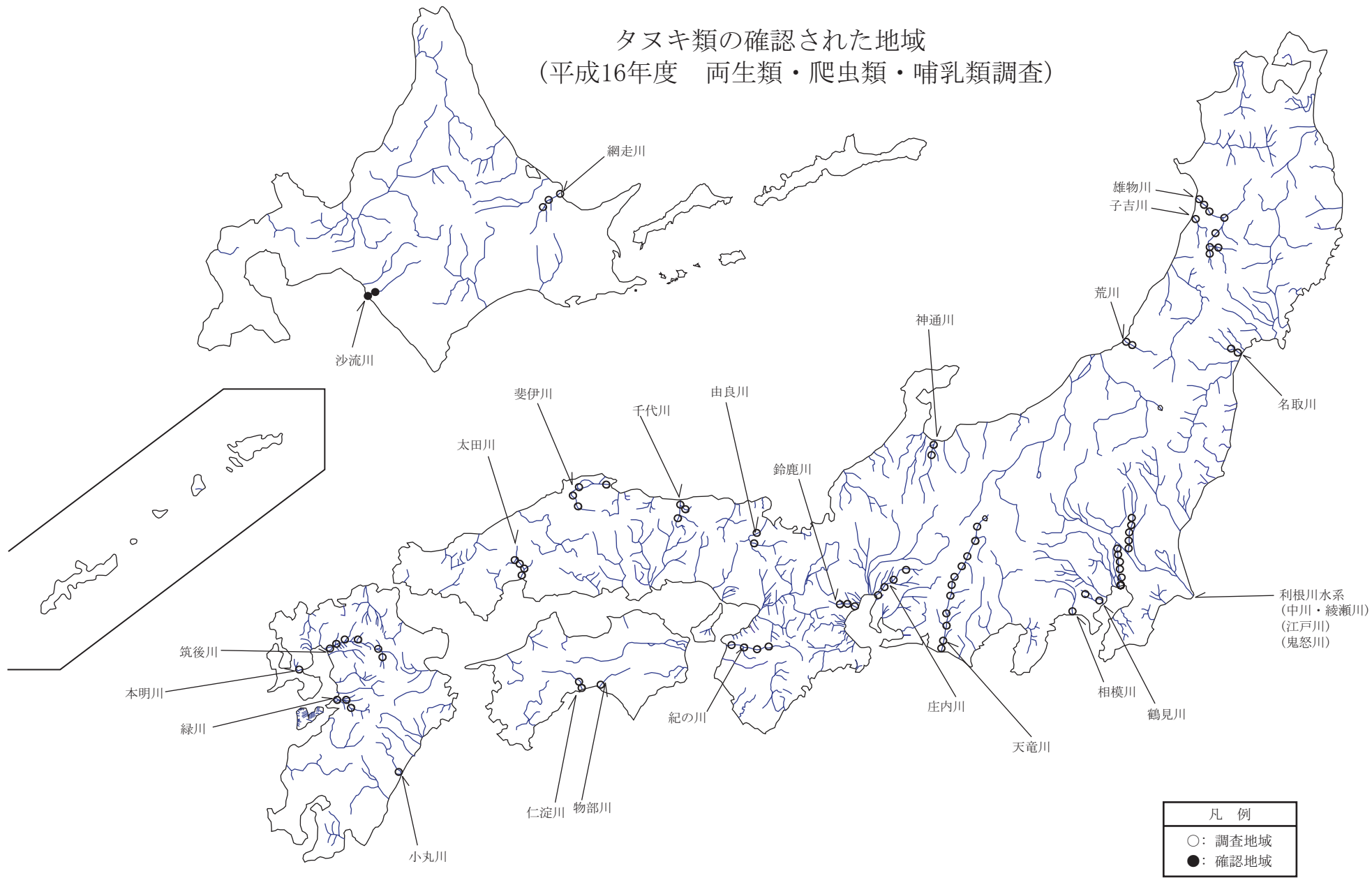
河川周辺における宅地化などにより、生息域が限定されつつあると考えられているタヌキ類（タヌキ、エゾタヌキ）、キツネ類（キツネ、キタキツネ）、イタチ類（テン、エゾクロテン、イタチ、アナグマ）、ウサギ類（ノウサギ、エゾユキウサギ）等の中型哺乳類の確認状況を整理しました。

タヌキ類は雑食性の動物で、山地から郊外の住宅地周辺まで広く生息し、主要な生息場所は樹林やその林縁部、川や沼沢等が散在する地域です。キツネ類は肉食性の動物で広い樹林地帯はほとんど利用せず、林縁や森と草原が入り組んだ環境、田園地帯等に好んで生息しています。イタチ類は雑食性に近い肉食性の動物で平地から山地の川や田んぼ等の水辺周辺に生息しています。ウサギ類は、草本類を中心に木本類の葉や若芽を食べる草食性の動物で、海岸地帯から農耕地、林野、牧草地、山岳地帯など広い範囲に生息しています。

今回の調査結果をみると、タヌキ類（タヌキ、エゾタヌキ）、キツネ類（キツネ、キタキツネ）、ウサギ類（ノウサギ、エゾユキウサギ）は北海道地方から九州地方にかけて、イタチ類（テン、エゾクロテン、イタチ、アナグマ）は東北地方以南の広い地域で確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみると、キツネ類とウサギ類で確認河川数の増加がみられました。

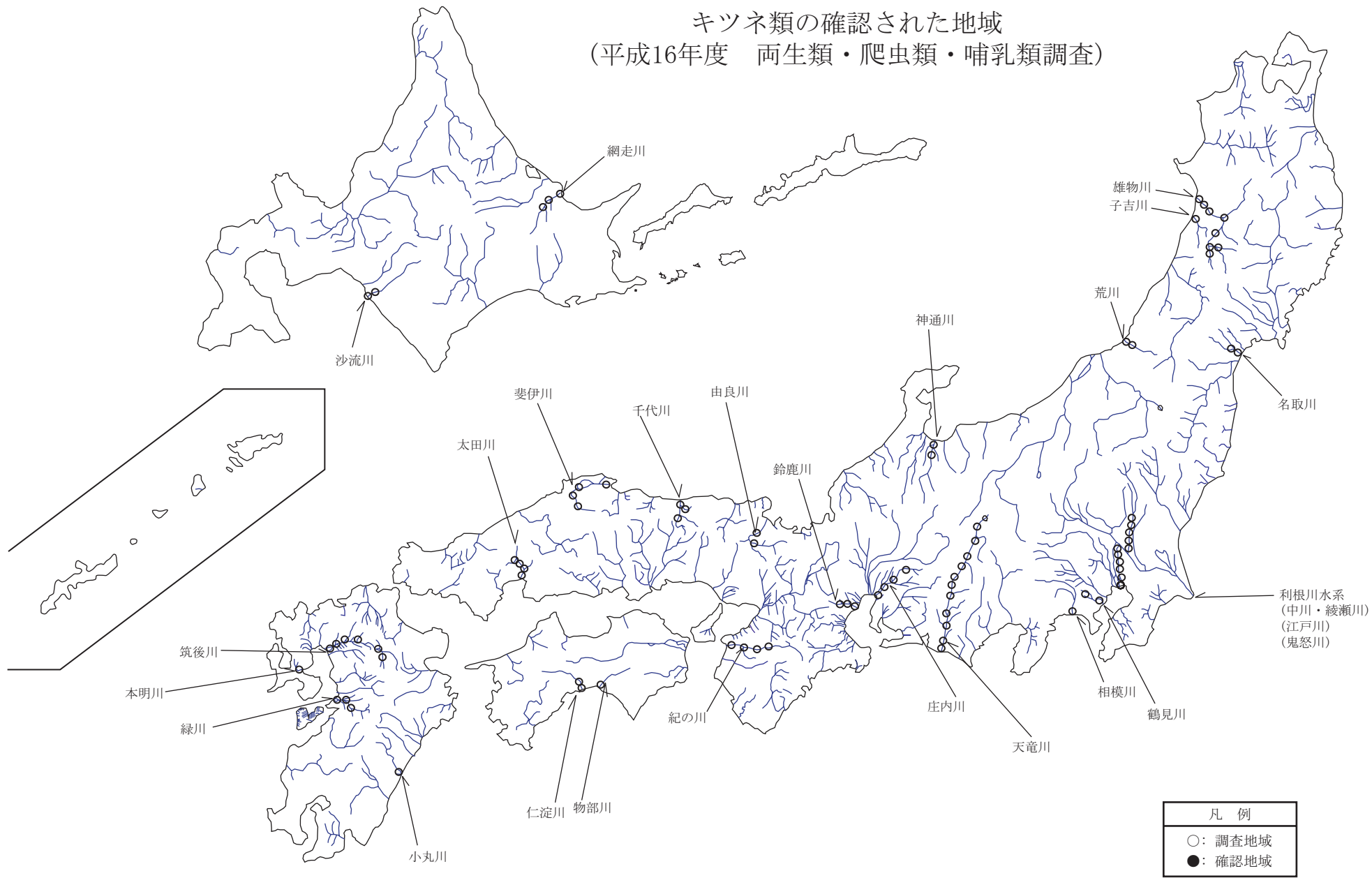
このことから調査対象河川及びその周辺環境は、これら中型哺乳類が生息するのに適した環境を有しているものと推測されます。

タヌキ類の確認された地域  
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

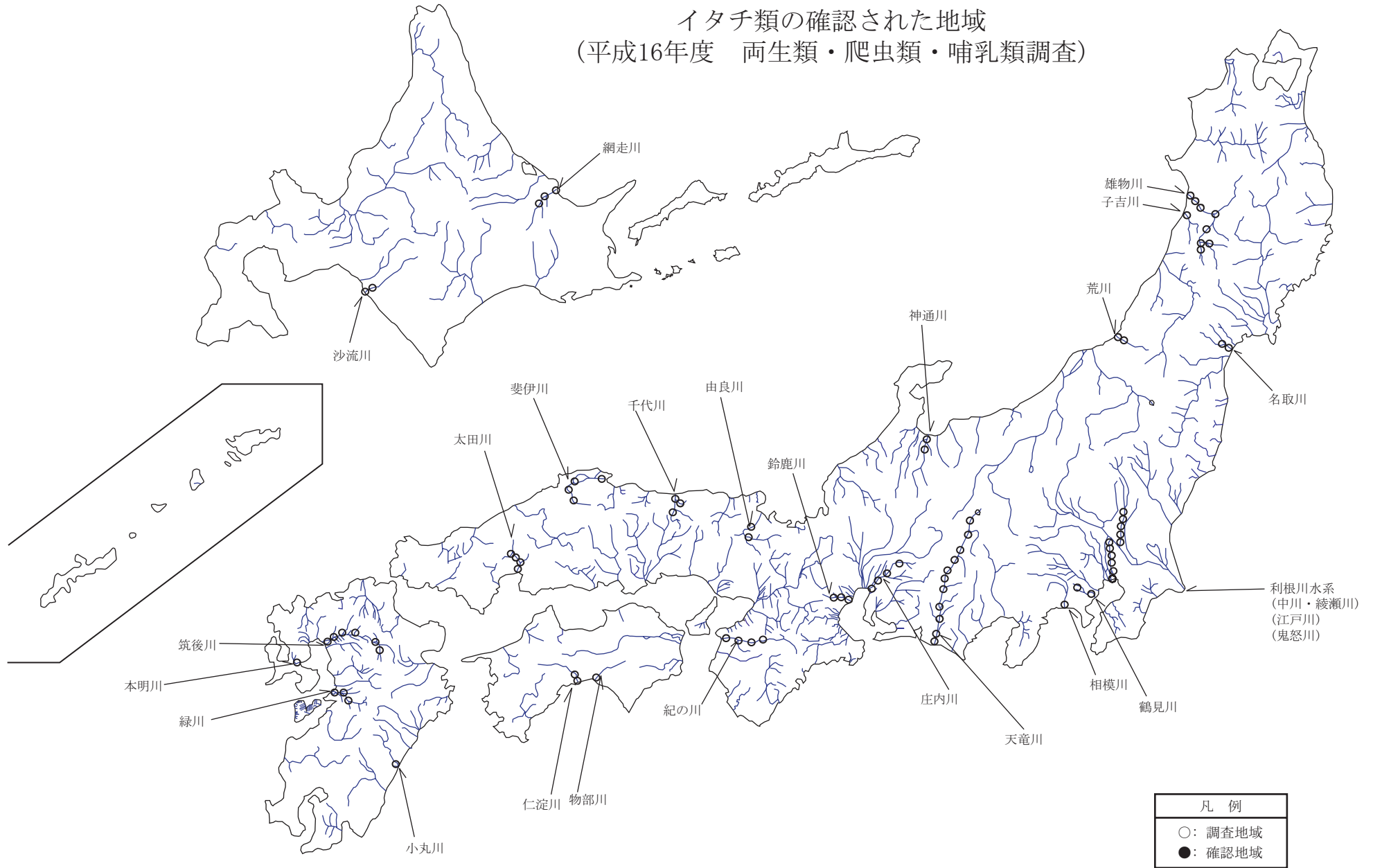
キツネ類の確認された地域  
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

イタチ類の確認された地域  
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

5-14

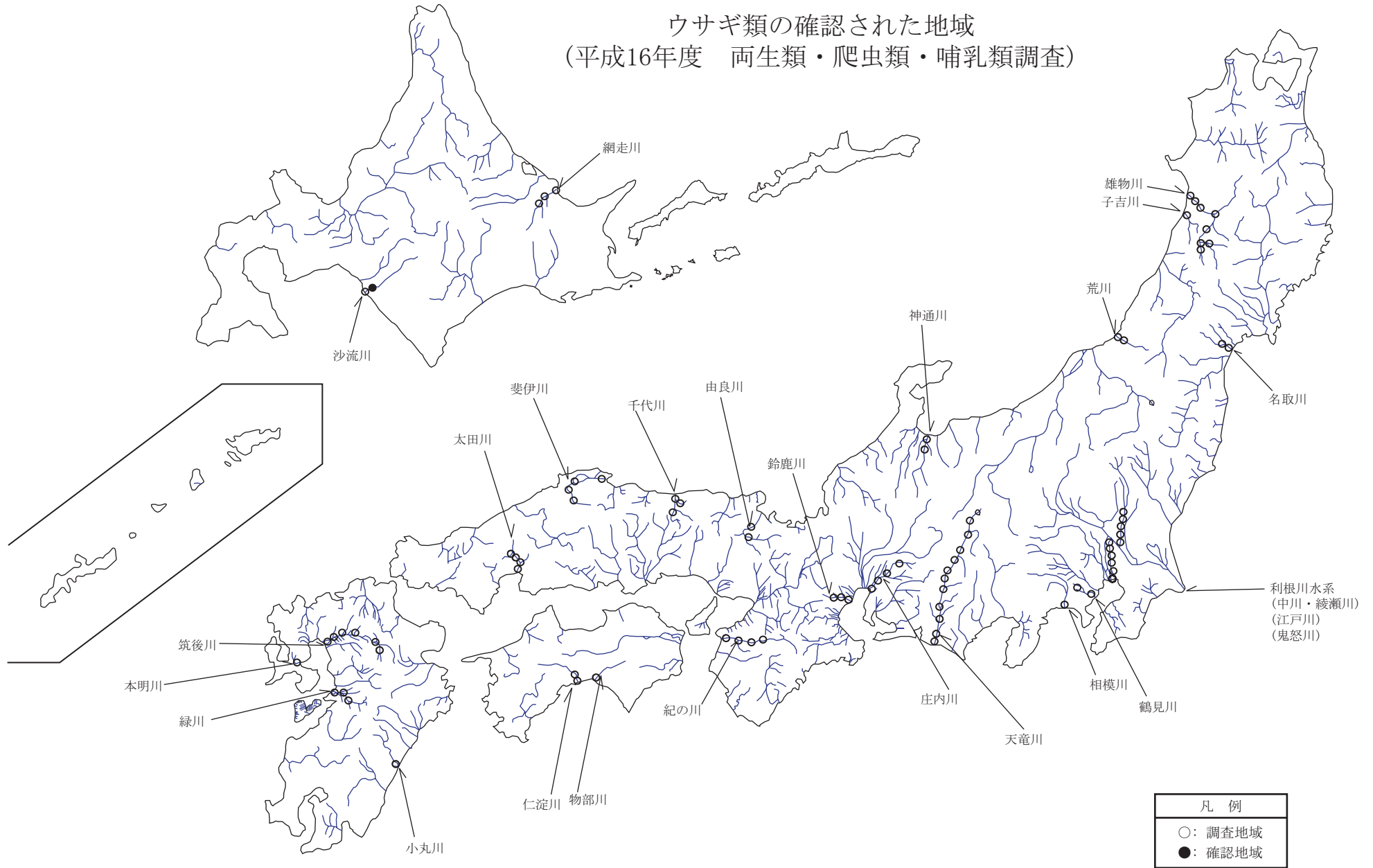


注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。



ウサギ類の確認された地域  
(平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

5-15



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

- 特定種の確認状況の変遷に大きな変化はみられず

特定種（地域個体群や情報不足を除く）を対象に、その確認状況の変遷を整理しました。対象としたダルマガエル、ヒナコウモリ、コテングコウモリ、イイズナ、カモシカは、今回とりまとめを行った 26 河川のうち、ダルマガエルは 2 河川、ヒナコウモリは 1 河川、コテングコウモリは 1 河川、イイズナは 1 河川、カモシカは 3 河川で確認されました。

また、前々回から今回の調査結果をみると、中部地方の天竜川のカモシカを除いて、前々回もしくは前回調査で確認されていたにもかかわらず、今回調査で確認されなくなった対象種はみられませんでした。

(資料掲載: 5-32～5-33ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 25 河川)

種類	特定種区分	前々回調査	前回調査	今回調査
ダルマガエル	絶滅危惧 II 類(VU)	1 河川	2 河川	2 河川
ヒナコウモリ	絶滅危惧 II 類(VU)	0 河川	0 河川	1 河川
コテングコウモリ	絶滅危惧 II 類(VU)	0 河川	0 河川	1 河川
イイズナ	準絶滅危惧(NT)	1 河川	1 河川	1 河川
カモシカ	特別天然記念物	2 河川	4 河川	3 河川

河川環境の変化をみる指標の一つとして、特定種を対象に集計を行い、経年的に確認されにくくなっている種、分布域が狭くなっている種がないかどうか、その確認状況の変遷を整理しました。

ダルマガエルは中部地方南部、東海、近畿地方中部、山陽地方東部と四国の一部に分布しています。水田の低湿地に生息していますが、生息環境の悪化により、各地でその絶滅が危惧されています。

ヒナコウモリは日本の食虫性コウモリの中では中型のコウモリで、中国（台湾を含む）、朝鮮半島、シベリア東南部、日本に分布しています。

コテングコウモリはインド北東部、中国、シベリア東部に分布するテングコウモリの日本亜種で、北海道、本州、四国、九州に分布しています。ヒナコウモリと同様、ねぐらとなる樹洞のある大木の消失にともなって分布域が狭まっているので、個体数も減少していると考えられています。

イイズナはユーラシアおよび北アメリカ北部に広く分布するイイズナの日本固有亜種とされ、東北地方北部の山地に生息しています。肉食性で、ネズミ、小鳥などの小動物を食べています。生息地である山麓や低地の開発にともなって生息環境の悪化が懸念されています。

カモシカは本州、四国、九州に分布する日本固有種で、近年、東北地方、中部地方を中心に分布域が拡大しています。低山帯から亜高山帯にかけてのブナ、ミズナラなどが優占する落葉広葉樹林、針広混交林に多く生息しています。

特定種は、分布域が限られており、環境変化による生息状況の悪化が懸念されています。今回確認された特定種のうち 5 種について、その確認状況の変遷を整理しました。その結果、今回とりまとめを行った 26 河川のうち、対象種の確認された河川は 1～3 河川と少ないものの、前々回もしくは前回調査で確認されていたにもかかわらず、今回調査で確認されなくなった対

象種はほとんどみられませんでした。

以上より、特定種の生息状況に大きな変化はないものと推察されますが、特定種は、生息地の改変などの影響を受けやすいことから、今後とも引き続きモニタリングをする必要があると考えられます。

- **カヤネズミを東北地方以南の 17 河川で確認**

高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣するカヤネズミは、近年、ヨシ原等の河川環境の変化により、その生息域が減少傾向にあると考えられています。そこで、確認状況の変化から、河川及び河川周辺環境の変化の把握を行いました。

今回とりまとめを行った 26 河川のうち、関東地方以南の 17 河川で確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみると確認河川数の増加がみられました。

(資料掲載: 5-19、5-33ページ)

#### 確認河川数の比較 (対象河川: 25 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
カヤネズミ	13 河川	15 河川	17 河川

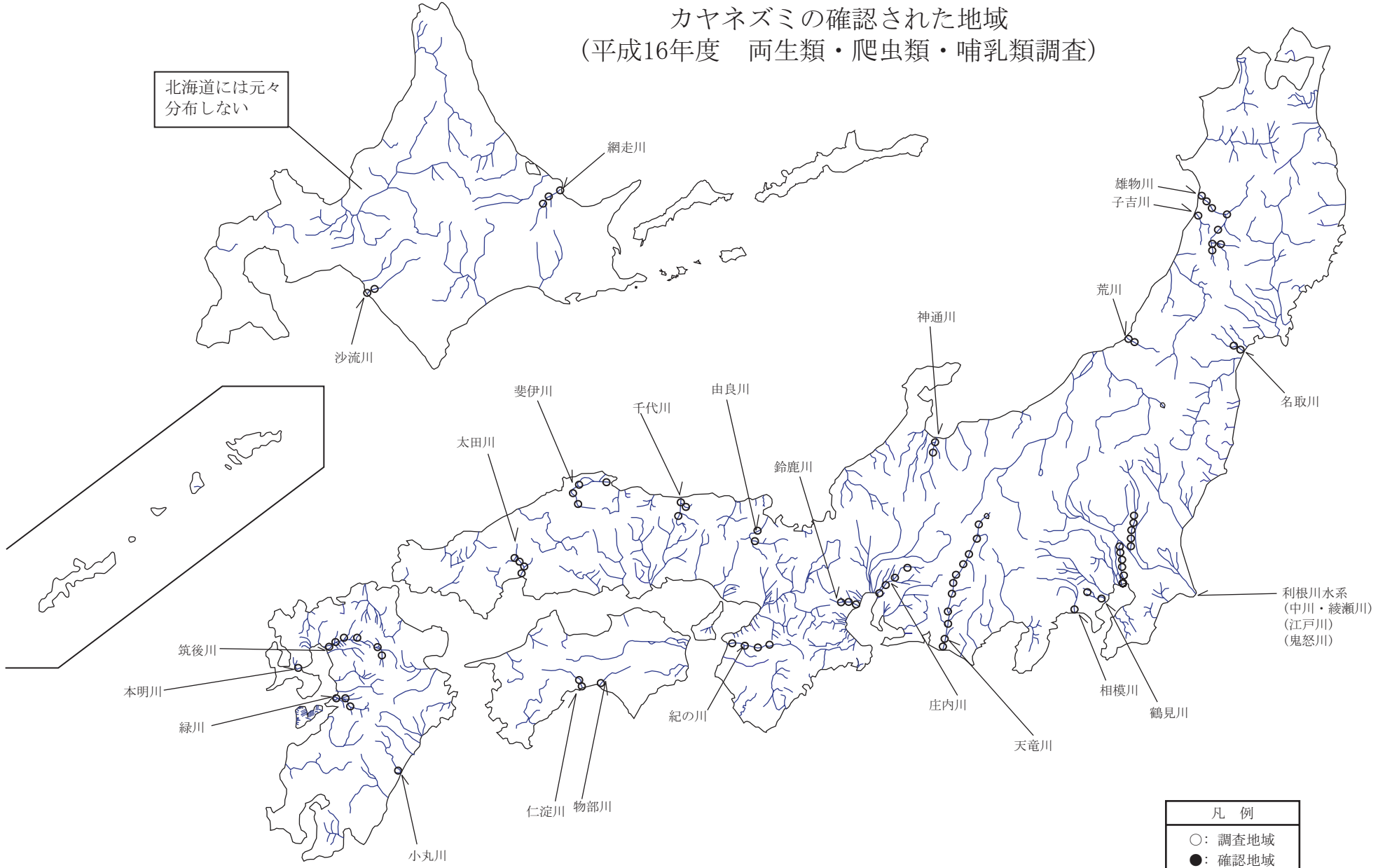
カヤネズミは本州の太平洋側では宮城県南部以南、日本海側では石川県以南、四国、九州、隠岐、淡路島、豊島、因島、対馬、天草諸島下島に主に分布します。高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣する本種は、近年、ヨシ原等の河川環境の変化により、その生息域が減少傾向にあると考えられています。

今回の調査結果をみると、カヤネズミは関東地方以南で確認されており、従来知られている分布範囲のほとんどで確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみると、前々回もしくは前回調査で確認された河川では、今回調査でも確認されました。なお、カヤネズミは、高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣するため、これらの確認状況は、調査範囲の違い等の影響を受けると考えられます。

カヤネズミは河川整備などの影響で生息域が狭められ、生息数も減少していることが知られています。従って、今後も引き続きモニタリングを続け、本種の生息状況を明らかにしていくことが必要であると考えられます。

# カヤネズミの確認された地域 (平成16年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

北海道には元々  
分布しない



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。